

氏名(本籍)	ふくしま なお やす 福島直恭(北海道)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博乙第1883号
学位授与年月日	平成14年12月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	日本語の変化の過程と定着に関する研究 —江戸語における接続母音 ai の長母音化を通して—
主査	筑波大学教授 林 史典
副査	筑波大学教授 博士(言語学) 坪井美樹
副査	筑波大学教授 博士(文学) 湯澤質幸
副査	筑波大学助教授 矢澤真人
副査	筑波大学助教授 大倉浩

### 論文の内容の要旨

日本語では、平安時代以後、漢語の借用や<音便><ハ行転呼音>のような音韻変化によって、古代に存在しなかった母音接続 (hiatus) が出現し、その母音接続には更に長母音化のような現象が発生している。中世における<オ段長音>開合の対立と消滅、近世における<エ段長音>などがそれであるが、本論文は、口頭言語の実態を反映した歴史資料が存在する近世の<エ段長音>に注目し、これを社会言語学的方法で解析することによって、日本語の言語史研究に新たな視点を確立しようとしている。

#### 〔本論文の構成〕

- 序章 言語変化に関する基本的な観点
- 第1章 江戸語における接続母音の長母音化
- 第2章 「洒落本」における接続母音の長母音化
- 第3章 語幹末にエ列音をもつ形容詞群の消滅
- 第4章 漢語における非標準的 e: 形式の衰退
- 第5章 言語変化の定着の方向性の解明に向けて
- 終章 言語の変化・日本語の変化

序章では、言語変化に対する著者の基本的見解が述べられている。すなわち、言語は変化することがその本質であるという前提に立って、従来「言語変化の原因」とされていたものを「言語変化の原動力の問題」「言語変化の実現の仕方の問題」に分け、後者は更に「言語変化の進み方の問題」「言語変化の定着の方向性の問題」に二分した上で、言語変化の原動力となる言語的変異形の選択を、‘自分が所属する社会集団あるいは所属したいと希望する社会集団(準拠集団)の社会的空間の中の、自分が理想とする位置に自分を位置づけることを目的とする行為—多くの場合、自分が理想とする社会的な地位を既に獲得している人をモデルとして、そのモデルと同一の選択をする行為—’であると主張している。

第1章と第2章は、「言語変化の進み方」についての考察である。まず第1章では、言語史研究に社会言語学的研究方法を適用するための方法について論じた後、その方法を用いて『浮世風呂』に現れた接続母音 ai, oi, ui の

長母音化を考察し、発話者の社会階級と長母音化率との相関関係を明らかにしている。そしてさらに、aiを含む言語形式とそれが長母音化したe:を含む言語形式の分布を手がかりとして、長母音化を受け入れた順序を解明するとともに、このような言語変化がどのような進行の仕方をしたのか、また何故そのような進行の仕方をしたのかを追及し、接続母音aiを持つ言語形式のうち、

- ①変化しても発話内容の解釈に支障をきたしにくい。
- ②e:形式が持つ非標準的表現価値（隠れた威信）が効果的に表現できる。
- ③すでに長母音化を受け入れた言語形式との間に何らかの特徴を共有している。

という3つの条件の充足度の高いものほど長母音化を早く受け入れたこと、言語変化の進み方に影響を与えるのは言語体系内の要因であることを指摘している。

第2章では、「洒落本」を対象として、『浮世風呂』に反映された長母音化の実態に先行する状況を分析し、両者の間に見られるai形式とe:形式の使用状態の差は、一連の言語変化の異なる段階を反映したものと解釈することができる点を明らかにすることを通じて、『浮世風呂』に反映された言語では、ai→e:がまさに進行中の変化であったことを証明している。

第3章と第4章では「言語変化の定着の方向性」を問題とし、接続母音長母音化後の状態が検討されている。すなわち、第3章では、連母音aiの長母音化が、かつて日本語に存在した<語幹末にeを持つタイプの形容詞群>が、ある時期にすべて消滅した要因であると主張している。長母音化して非標準的な価値を得た改新形(ex. あぶねえ)と<語幹末にeを持つタイプの形容詞(ex. あまねい)>とが、形態上接近し、その結果、後者が日本語の語彙体系から姿を消したということである。このような解釈を通じて、言語変化を説明するためには長期的視野が不可欠であること、従来説明が不可能であった<語幹末にeを持つタイプの形容詞群>の消滅も、連母音の長母音化と密接な関連があったことを論証している。

第4章は、同様の視点に立つ漢語名詞の考察である。『浮世風呂』ではかなり効率で長母音化が見られた漢語名詞内の接続母音aiが、その後長母音化することがほとんどなくなってしまったのには、明治維新以後の漢語の大量借用、大量生産、およびそれらの一般化が大きく影響しており、日本語に漢語が増えたために接続母音eiを含む「あんない(安寧)」のような漢語名詞も増加し、これらと、aiが長母音化した「あんねえ(案内)」のような非標準形式漢語との形態的な衝突もまた大きくなって後者の存在が不可能になったというのが、その結論である。

第5章では、江戸語における接続母音の長母音化という現象の分析から得られた知見を基に、言語変化研究、特に「言語変化の定着の方向性」の考察においては、言語をどのようなシステムとして捉えるべきかという問題が検討されている。最初に、従来の「言語体系」という作業仮説では、少なくとも言語変化を動的に捉えるという目的には適応できないことを指摘し、次いで、その「言語体系」内に「規範の体系」というレベルを措定することによって、「言語体系」が言語変化研究にも有効な作業仮説となり得ることを主張している。最後に、「常に変化するシステムとしての言語」とは、どのようなイメージとして把握すべきものであるかという点について論じ、自然科学の分野で重視されている、複雑な振る舞いをするシステムに関する新しい捉え方を言語変化についての解釈にも取り入れる可能性、有効性について検証している。

終章は、本論文の総括で、一連の考察を通じて得られた著者の方法論、言語史観、今後の展望等について論じられている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

日本語の歴史的研究には、文献的事実の記述・分析を主としているものが少なくない。本論文が考察の対象とした近世の長母音化に関する先行研究も同様であって、多くは文献的事実が位相論的に解釈されているに過ぎない。言語史的解釈が試みられる場合も、広い視点から変化の動因を究明しようとした論は皆無である。そのよう

な点を批判し、言語は変化することがその本質であるという前提に立った独自の事実分析と歴史的解釈を提示しているところに、本論文の特色と価値がある。

敷衍すれば、次のような点が特に高く評価される。①まず、社会言語学的視点に立って新たな角度から鋭く長母音化の事実を捉え、解析している点である。これが本論文の基礎となっている。②次に、関連する現象を的確に捉え、歴史的事実と事実の関係を明らかにすることによって、長母音化のような事象を変化の動態として記述している点である。これによって、従来説明が困難であった〈語幹末にeを持つタイプの形容詞群〉の消滅などについても一往の解釈が可能になった。③漢語名詞の長母音化に関する歴史的解釈も、特記に値する。これについては、問題の設定そのものが新しく、加えて、それを明治期における漢語の増加と関連付けて広く捉えている点に深い識見が認められる。④言語変化を、言語内の要因からだけでなく、人間行動の一部として、外的要因からも検証すべきであることを主張している点も、評価すべきであろう。多くの研究が、これまで、〈行為としての言語〉という視点を見失ってきているからである。⑤総じて、従来に比べてはるかに広く、新しい視野で日本語の音韻史を記述しようとしているところに、大きな研究成果と発展性が認められる。

本論文は、たいへん高い達成度を示してはいるが、これにも今後の課題はなしとしない。その一つは、本論文のような視点と方法で解釈できる歴史的事象はどのような領域・範囲に及ぶのかを、他の多様な事象を対象とする検証によって明確にすることである。そのような綿密な追及を通じて、本論文の主張がさらに大きな説得力を獲得することが期待される。文献および文献上の事実に対する文献学的考察にも、一層の深化が求められる。本論文で扱われた資料には一定の均質性が認められるが、今後の研究に予想される事例の解釈には、このような面での方法論的根拠が不可欠であるからである。以上のような点が指摘されるとは言え、それは本論文の価値を減じるものではない。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。